

日本陸軍史研究

メツケル少佐

宿利重一〔著〕



メツケルなくして

「兎玉」「好古」なし

ドイツの名参謀が開く

日本陸軍の草分け！

限定二百部復刻



マツノ書店

「自序」

日清、日露の兩戰役は、「メツケル戰術の直譯的なるもの」と断定せし人がある。勿論、大に論議の餘地存するにかゝはらず、支那事變、大東亞戰の經過中にさへも、「メツケル戰術が生きてゐる」と嘯々し、私は破顔一笑せねばならなかつた。明治十八年三月十八日、我が陸軍大學校雇教師として來朝し、近代戰の戰略、戰術(或はモルトケ戰術)を講じたメツケルを記憶し、且つ回想する者が今日もあるか。恐らく絶無に非ざるも稀有に過ぎぬであらうが、我國に猶ほ「メツケル戰術」の残つてゐる事實を否定し得ぬ。

普魯西の參謀少佐クレメンス・ウキルヘルム・ヤコブ・メツケルは、滿三年間の滞在中にも、先制を説き、緒戰に勝たねばならぬとし、獨逸に歸つて以後——フランクフルト・アム・マインツで兒玉少將—源太郎の來游を迎へ、宣戰の布告を俟つて準備するが如きことなく、疾風の恰も枯葉を卷くやうに行動すべしと説き、圖上にフランスの或る地點を示して著想を明かにせしのみか、その陸軍大學校教頭たりし時、一八九三年明治二十六年の三年生のため此のことを講義し、具體的にナンシーの南方二十五軒の砲臺、堡壘の間を突破すれば、再びパリに城下の盟をなさしむるの、困難あらんも、不可能なきを闡明した。メツケルの教室には、獨逸國の參謀總長シユリーフェンも、學生達の後方に在りて耳傾けた尉として在學中であり、メツケルの統裁下に參謀旅行にも亦參加敵が難攻、不落と恃む砲臺、堡壘の何れかに缺陷を鋭く偵知し勿論、不可能と看做される諸の障碍あるは之を覺悟して其の準備な足の將兵を養ふ。困苦に堪へ、缺乏を忍び、犠牲を最高度に發せしならぬ機會に用ひる。斷乎として豫備兵を混淆せず、若き健兵の



復刻版の装幀です
(デザイン・毛利一社)

行李」の文字を知るが、形状を辨へぬので、會得に難んじた。勿論、かう云ふ程度の「陸軍大學校學生」なるものに、必ずメッケルも呆然たりしであらうが、斷じて失望せず、直ちに實物を自ら指圖して先づ製作せしめ、講堂に之を搬入して親しく學生に示した。そして此の實物による「大行李、小行李」の講義は、我が陸軍大學校の第一期生のためにのみなされたのでなく、第四期生 明治十九年一月二十五日學で、後に陸軍大將となつた内山小二郎、仁田原重行、大井成元、陸相となつた岡市之助の諸氏も、これを聽いて理解し得たのである。

かう云ふ程度であつた。メッケル少佐の來りし時代の我が兵學は、餘りに幼稚であつた、と云ふよりも、萌芽の期であつたことを承認せねばならぬ。この幼稚極まる日本の兵學界のために、メッケル少佐は其の造詣を傾けるのであつたが、例へば大陸に兵を輸送する時に考覈し、

「若し日本が何師團てふ精銳を大陸に進めて作戰する時、勝利に缺くべからざる糧食、彈藥その他の給養を何うするか」

と設問する。我が帝國に於ける「大戰」と云へば、その規模に於ても、兵數に於ても、戰線に於ても、萬人が關ヶ原役に指を例外なしに屆するであらう、「大戰」たりしに違ひないのであるが、兵站——給養、糧食に就て苦心は左してなかつた、絶無でなかつたにしても、「之が驛敗

を決する重大なる鍵なりしか」に稽へる外ないのである。戰爭は唯だ對手を倒すにあり、兵站到意を傾注せし名將未だ日本にありしを知らぬにかゝはらず、メッケル少佐は我が將來に於ける作戰を説き、船舶を以て大陸に兵を輸送し、上陸地、進駐する所に逐次に給養の爲の基地を設け、何萬、數十萬の將兵に衣食に備せしめず、武器、彈藥、器材の補給に決して缺乏を訴へしめざる用意を語るのであつた。

糧食その他の國內に於ける買収、徵發と云ふやうなことは、軍政の府にてなし、經理の之を軍吏に限られたる管掌と考へてゐる人々には、メッケルの講義が單に斬新とか、奇抜と云ふのでなく、驚異であり、不可解でさへあつたのみか、將來の參謀官に必要にして缺くべからざる資格なりやを疑ふものもなしてなかつた。明治六年一月十日、徵兵令の發布あり、兵種も明かに砲兵、騎兵、歩兵、工兵、輜重兵に區別せられ、聽て歩兵、騎兵、砲兵、工兵、輜重兵となつたにかゝはらず、日清ノ役を經過しても、

輜重輸卒が兵隊ならば

蝶や蜻蛉も鳥の中

と云ふ俚諺が遺つてゐたのである。この事實に稽へても、猶ほ「兵站」に對する觀念の乏し

陸軍大學校へ

く、メッケル少佐の説く眞意を解するに困難があつたと推せられる、この兵站到就き、初期の我が陸軍大學校の學生の如何に無知識であつたか、第一期卒業生で、日清ノ役に第二軍司令官 大山大將の隸下に少佐參謀、日露ノ役の第一軍司令官陸軍大將男爵黒木爲樹の參謀長であり、壽正に八十四にして健在の陸軍中將藤井茂太氏の追憶に聽くことにしよう。屢々私が將軍を訪ふて傾聽する時、

「明治十八年十一月、メッケル少佐の統裁下に、陸軍大學校學生の最初の參謀演習旅行が茨城縣で施行された。この演習は取手町の附近で、第一日を開始したのであるが、私の第一日の任務は、師團の兵站監であつた。兵站到就てメッケル少佐の新しい講義を聽いてゐても、實地に臨んで、如何にするか分らぬ。當時の兵站監の參謀であつた石橋君——健藏——の云ふには、兵站なるものは糧食を扱ふのである。そこで梅干でも集めたらば、職責を盡したことになるだらう……で、私共は、聊か梅干を集めたのである」

と語るのであつた。その石橋健藏も、陸軍大學校第一期の卒業生で、日露ノ役に第二師團參謀長たり、陸軍中將にして永眠したが、さう云ふ人物にしても、猶ほ明治十八年十一月——陸軍大學校の學生として兵站部の參謀たりし時、梅干を集めることが職責を果す所以なるかに考へてゐた、眞剣に考へてゐたのである。

この藤井、石橋の兩將軍の兵站到對する追憶も、決して笑話に非ず、示唆に富む事實であるが、更に「鐵舟ニ依ツテ河川ヲ猶ホ敵前ニ於テ渡過ス」と云ふメッケル少佐に對し、邪念なく、「鐵にて製造したる舟は、水上に浮ぶ道理なし矣」と否定し、斷じて首肯しなかつた陸軍大學校の學生もある。日清、日露の兩戰役のみならず、支那事變の過程にも、鐵舟に依つて工兵の疎かしき殊勳を樹て佳話は、寔に枚擧に遑なく、戰果を大ならしめてゐるが、メッケル少佐が此の鐵舟を説いても、陸軍大學校第四期生の中には、頑強に之を否定するがあつた。こゝに於てメッケル少佐は、先づ鐵舟二、三隻を製造、多摩川に運搬せしめ、日時を卜して演習せしむることとした。陸軍大將男爵大井成元氏は、陸軍大學校第四期生であるが、この鐵舟の多摩川の演習に、親しく參加した時のことを追憶し、

「その日には陸軍大學校の學生のみならず、參謀次長の陸軍中將男爵小澤武雄、陸軍次官の陸軍少將桂太郎の兩氏その他の軍令、軍政の府の有力な人も出張し、最も熱心に其の狀況を視察したのであるが、鐵で製造した舟が河川に浮び、兵器として極めて有利、且つ有力なものであることを知つたのである」

陸軍大學校へ

メツケル將軍銅像（明治四十五年六月、陸軍大学校内庭に建立）



目次

- モルトケの微笑
 - 機智に揶揄をも
 - モーゼル・ワイン
 - フランスの抗議
 - 日露ノ役以後も
 - 運命の奇のみか
- その靴痕―伝記者
 - ケルンを故郷に
 - 大学時代の当化
 - 鐵十字二等勲章
 - 児玉大佐と共に
 - 日本人メツケル
- 陸軍大学校へ
 - 敗残のフランス
 - ビスマルクの誤算
- この事実ありき
 - 陸軍大学校設置
 - メツケルを招く
 - 教導も徹底的に
 - 近代用兵の会得
 - 勝利・創意を生む
- 臨時陸軍制度審査委員
 - 自然的の成長へ
 - その頃の将兵は
 - サアベルの文官
 - 月曜会なるもの
 - 川上と児玉あり
 - 不如人和の極か
 - 如何に憲査せる
- 日本の成長
 - この気魂を見よ
 - 小川又次を思ふ

頭脳か抱擁力か
メツケルの告別
異色の独断専行
渝らざりし精錬
陸軍刑法を読む

健兵養うべし

モルトケの衣鉢
新帝と其の寵臣
質実剛健に生く
群中に抽出して
両者深く理解す
その著想を語る
何故に罷めしか
大村益次郎先生
鍊成と幼年学校
普魯西は変貌す
武人の無邪気さ
勝たざりし所以
要塞戦を閉却す
精神力の問題へ
風紀頹廢を如何
人名索引(抄)

巻末付録

メツケル將軍の思出
大井成元口述

西洋戦術沿革史

メツケル参謀少佐口述
「軍事史研究」(第四卷 第一号 一九三九年、同第二号、軍事史学会発行)

■著者の宿利重一は大分県生まれ。中学生のとき暴発事故のため両手の指を失い、両手首をハンカチでくるみ、ペンをはさんで筆記していたようです。苦学しながら才能を認められ「必ず生前に深い関係のあった人を訪問し取材する」という鉄則を貫いた人物誌は「児玉源太郎」「乃木希典」(以上マツノ書店復刻)「乃木静子」など紙価の高いものばかりです。

■静子夫人の長姉の邸に久しく寄寓していたという最高の条件にもかかわらず『乃木静子』は初版、再販を経て二十四年後の昭和十二年、増補版を出しており、「児玉源太郎」は紙不足、技術者不足などで本作りが最も困難だった昭和十八年の「改訂三版」にして、ようやく納得という「一意専心」の人でもあります。

■自著のみによる新企画「日本陸軍史研究」は敗戦のため、本書だけに終わりました。

■本書は史料価値もさることながら、随想風で読みやすい章も多く、明治初期の日本を西洋人の目で見るとの楽しみもあります。

■体 裁 A5判上製箱入600頁

■定 価 一万三千元(税・共)

■予約特価 一万円(税・共)

■特価締切 22年5月末日

■発売開始 22年5月10日

本書はすでに完成しており売切れの際はご容赦下さい

限定三百部 (番号入)

▼書店不卸 ▼締切厳守 ▼返本OK

山口県周南市銀座2-13

〇〇八三四〇二九五

マツノ書店

URL <http://www.matuno.com>

●「申込ハガキ」にあるセット特価をご利用下さい。



『日本陸軍史研究メツケル少佐』の復刻を慶ぶ

軍事史学会副会長 原 剛

日本陸軍は約八十年の歴史において、多くの外国人を招いて西欧の軍事制度・戦術・技術などを学んだが、その中でメツケルほど影響力を与えた者はいない。メツケルは、日本陸軍が創設当初の国内治安重視期から、対外戦に備えた国土防衛重視に転換する時期に、陸軍大学校教官として招聘され、戦術教育はもちろん軍事制度の改革に多大の尽力をし、日本陸軍の基礎造りに貢献した人物である。

かつて三十数年前、私が明治陸軍史を研究するに際し、是非とも手元に置き参考にしたいと思い、神田の古書店を廻ってやつと探し求めた本が、この『日本陸軍史研究メツケル少佐』であった。本書は戦争中の昭和十九年に宿利重一が出版したもので、現在では古書店でも入手困難な状況にある中、山口県周南市のマツノ書店から復刻されることは、誠に慶ばしいことである。

メツケルは明治十八年三月、いわゆる御雇外国人として来日し、新設されたばかりの陸軍大 학교において満三年間ドイツ兵学（戦術）を教授し、これまでのフランス式の論理的・数理的な講義的方式の戦術教育を、ドイツ式の実践的・応用的な実践的方式の教育に転換して、中堅将校の部隊運用能力を飛躍的に向上させた。メツケルは陸軍大学校における戦術教育だけでなく、日本陸軍の軍制改革にも大きく貢献した。すなわち鎮台制から近代の機動的な師団制への改編、教育を統轄する監軍部の設置、戦時に必要な予備後備将校養成制度の確立、士官学校入校前と卒業後の隊付勤務を重視した士官候補生制度の採用など、国防軍としての基礎造りに貢献したのであった。メツケルのこのような軍制改革意見を実質的に推進したのが、桂太郎・川

上操六・児玉源太郎などであった。

このようにメツケルは、日本陸軍に多大の貢献をしたにもかかわらず、メツケルに関する研究は少ない。メツケルについて最初に書かれたのは、今回の復刻で巻末に載せられた大井成元の「メツケルの思出」である。その後、小山弘健『近代日本軍事史概説』（昭和十九年）、松下芳男『明治軍制史論』（昭和三十一年）、三宅正樹「メツケルにおける一九世紀ドイツと明治前期日本との接触」（『人文研究所報』第六号、神奈川大学）、林三郎『参謀教育とメツケルと日本陸軍』（芙蓉書房）などが、来日中のメツケルの活動について書いてある。来日前および帰国後については、中村赳「メツケル少佐新考」（『軍事史学』第一〇巻第四号）がある。

メツケルについて総合的に述べた日本語の伝記は、本書が最初であり、その後も出ていない。それだけに本書はメツケル研究の貴重な文献であると言える。後にドイツ人ケルストにより「ヤーコブ・メツケル」という伝記（吉田再造訳が防衛大学『走水評論』二一号に掲載）が刊行されたが、日本におけるメツケルの活動・貢献について、日本側の多くの史料と関係者の聞き取りを基礎にして明治軍事史上に正當に位置付けし、かつ彼の生涯についても概括的に述べている点、今回復刻される本書の方が優れている。

本書は、六章からなり、各章がやや独立的に書かれていて、どの章から読み始めてもよいようになっている。一章「モルトケの微笑」には、陸軍大学の教官としてメツケルが選ばれた経緯が、二章「その靴痕と伝記考」には、メツケルの来日する前と帰国後の略伝および没後に日本の有志により追悼会が行われ胸像が陸大構内に建設された経緯が、三章「陸軍大学校へ」には、日本陸軍がフランス式からドイツ式に転換した経緯とメツケルの陸大における教育概要が、四章「臨時陸軍制度審査委員」には、メツケルの軍制改革意見がこの審査委員によって審議され桂太郎次官・川上操六参謀本部次長（後近衛歩兵第二旅団長）・児玉源太郎参謀本部第一局長（後監軍部参謀長）などによって推進された経緯が、五章「日本の成長」には、メツケルの教育を受けた者の成長過程が、六章「健兵を養ふべし」には、その後のドイツ・フランス・日本の状況が述べられ、結論として健兵の必要性を強調している。

本書は、昭和一九年という時期に書かれ、やや当時の情勢に影響されている面もあるが、メツケルを中心に明治期の陸軍史を客観的に論じたものとして、陸軍史研究の貴重な文献であると言えよう。入手困難な現状において、本書が復刻されることは大変意義深く慶ばしいことである。

メツケル研究の決定版



國學院大學法科大学院在籍 戦史研究者

長 南 政 義

「予をしてドイツ師団を率い来らしめば、日本軍の如きは縦横に撃破し得べし」

これが、明治十八年に陸軍大学校に着任したメツケルが発した第一声であった。それから約十九年後に開戦した日露戦役の際して、メツケルは、「日本陸軍には私が育てた軍人、特に児玉將軍が居る限りロシアに敗れる事は無い。児玉將軍は必ず満州からロシアを駆逐するであろう」と日本陸軍の勝利を断言したといわれる。三年間という短い日本滞在期間に、メツケルは何を成し遂げたのであろうか。

に働きかけた。明治十六年、大山巖陸軍卿を团长とする欧州兵制視察団が一年の旅程で欧州へ派遣され、桂太郎は川上操六と共に随員に選ばれた。大山の意図は、桂は軍制を、川上操六は軍令を研究させるというものであった。そして、視察途中に、ロシア式兵制を採用すべきであると考えた桂が川上と共に、フランス派であった大山を説得し、その同意を取り付けた。その結果、陸軍士官学校の教官はフランス軍人、陸軍大学校の教官はロシア軍人ということになり、ロシアの参謀総長モルトケの推薦により、明治十八年三月、メツケルが来日した。

着任当時のメツケルの年俸は五千四百円。当時の日本陸軍大將が六千円だったというから、明治陸軍がメツケルにかけた期待の

寿太郎『北京篇』といった伝記の執筆者として知られている。宿利は、本書執筆のために、資料を陸軍省、参謀本部、陸軍大学校に求め、メツケル門下生である、陸軍中將・藤井茂太、陸軍大將・内山小二郎、陸軍大將・大井成元にも取材を行っている。戦中に執筆された本書が、現在もメツケル研究の基本書たる位置を失わない理由は、そうした点にあるのだろう。

巷間によく知られるエピソードに満ちたメツケルであるが、その伝記は意外と少ない。戦前に刊行されたものは、今回マツノ書店が復刻する、宿利重一『日本陸軍史研究メツケル少佐』（日本軍用図書、一九四四年）と

大井成元口述『メツケル將軍の思出 附西洋戦術沿革略史』（軍事史学会、一九三九年）の二冊のみであり、戦後に書かれたメツケル

帝国陸軍もプロシア陸軍をモデルにした軍隊であるというのが一般的理解であろう。

そして、帝国陸軍におけるプロシア的軍制確立に大きく貢献したのが、宿利重一『メツケル少佐』の主人公クレメンス・ヴィルヘルム・ヤーコブ・メツケル (Klemens Wilhelm Jacob Meckel、一八四二年～一九〇六年) である。

実は、メツケル着任前の帝国陸軍は、幕府陸軍と同様にフランス式軍制を範としていた。帝国陸軍が明治三年から明治二十二年までに雇用したフランス軍人が五十四人の上ったという点や、初期の幼年学校の教官がすべてフランス人で、練兵場での号令や、数学の九九に至るまですべてフランス語で行われたという事実が、維新直後の帝国陸軍のフランス的性格を雄弁に物語っている。

このフランス式に異を唱えたのが、桂太郎であった。明治三年、桂は、賞典禄を元手にプロシアへ私費留学をした。帰国後、木戸孝允が山県有朋に依頼した結果、陸軍大尉として陸軍に入った桂は、ドイツ公使館附武官を経て、普仏戦争で勝利したプロシア式軍制を採用すべきだと考えるようになり、同じ長州藩出身の陸軍の権力者山県

メツケルは、陸軍大学校での教育にとどまらず、当時の陸軍首脳が推進していた軍制改革にも意見を述べ、軍制の基礎はフランス式からプロイセン式に変わり、士官学校教育もドイツ式となった。

メツケルの薫陶を受けたのは、陸軍大学校の第一期生から第三期生までであったが、児玉源太郎などの高級軍人も講義を聴講した。メツケルの指導を受けた学生には、日露戦争で満洲軍総司令部の作戦担当参謀・松川敏胤や、兵站担当参謀・井口省吾等がいる。まさに、日露戦争が、「メツケル戦術の直訳的なもの」と評される所以である。

そして、メツケルが日本政府より勲一等瑞宝章を贈られ、陸軍大学校構内に、彼の胸像が建てられたことは、日本側のメツケルへの評価の高さを示すものであろう。

本書は、「日本陸軍史研究」(全五巻)のうち第二巻として執筆されたものであるが、大東亜戦争終戦に伴い、陸軍も解体したためか、結局、『メツケル少佐』一冊のみしか刊行されずに終わった。

著者の宿利重一は、『乃木希典』、『乃木静子』、『旅順戦と乃木将軍』といった乃木の研究書や、『児玉源太郎』、『小村

本陸軍』(芙蓉書房)は、前二者に依拠して書かれたものである。そして、司馬遼太郎『坂の上の雲』(文藝春秋)に登場するメツケルのエピソードの多くが、『メツケル少佐』に負うところが大であることは今回復刻される本書を読めば明瞭であるだろう。

邦語で書かれたメツケル研究の白眉とされる本書は、多くの研究者や読書家が渴望する一冊であるものの、現在では入手困難であり、運良く古書店で手に取ることができて二万五千円前後と高価な上に、昭和十九年という大戦中の資源不足により紙質が最も悪い時期に刊行された本であるため、長期の使用に耐え得ない本が多い。この点に鑑みると、マツノ書店が、本書を復刻する価値は大いにあるといえる。

本書の著者は、過去にマツノ書店により復刻された『児玉源太郎』や『乃木希典』の筆者として名高い宿利重一である。宿利の文章は、多くの史料から博引旁証をすることで実証性を確保する一方で、平易かつ躍動感あふれる文章で読者の心をつかんで離さないところに大きな特徴がある。今回の復刻を縁由として、是非、本書を御一読なされることをお勧めしたい。